

春秋彩

Syunjusai

特集

「これからの私たちの暮らしを考える
ーエネルギー問題をめぐってー」…………… 2

おすすめの一冊……………	6
活躍する卒業生……………	7
国際交流……………	8
研究活動紹介……………	10
大学の動き……………	12
INFORMATION……………	13
生き生き元気種……………	14
熊本県立大学CPDセンターが完成……………	15



 熊本県立大学

春秋彩とは 万葉集の額田王の春秋を論じた歌の題詞「春山の万花の艶と秋山の千葉の彩」から採ったもの。「春秋」には年月の意味もあり、「春秋に富む」若者を彩る学園の四季を表している。

熊本県立大学広報誌

2011 AUTUMN

vol. 35

あいさつ



学 長
古賀 実

東日本大震災によって我々は、自然エネルギーの偉大さとその脅威の前には人の力は無力であることを改めて思い知らされました。また、我々は度重なる地震、風水害に見舞われ、それらに耐え、乗り越えて生きていかなければならない宿命にあることも教えられました。

大地震に伴う原発事故は復旧・復興活動の極めて大きな障害となっているだけでなく、放射性物質の処理・安定化に多大な犠牲を被災地の皆さんに強いる結果となり、水、大気、土壌など広範囲に及ぶ環境汚染も懸念されています。

原子力発電は地球温暖化防止の切り札として考えられ、主要なエネルギー供給源として導入が推進されてきましたが、福島での事故を契機として、その安全性に対する課題、エネルギー確保の問題、さらには我々のライフスタイル全般についても考え直す必要が生じてきました。

地球環境との「共生」をはかり持続可能な社会を構築していくには、多様なエネルギー資源の活用、これまで以上の省エネルギー技術の開発、普及が求められています。本号では、特集としてエネルギーの問題を人々の暮らしの立場から取り上げ考えてみたいと思います。

これからの私た —エネルギー問

木質バイオマスエネルギー

環境共生学部 居住環境学科
教授 中島 熙八郎

2011年3月11日14:46東北においてM9.0の巨大地震と大津波が発生し、東京電力福島第一原子力発電所では原子炉冷却装置の電源が破壊され、炉心溶融によると見られる水素爆発が発生し、大量の放射能が拡散されました。地球温暖化を和らげると期待された原子力発電が、とてつもなく危険なものと思われるようになり、日本はじめ世界の人々に今までとは違った形でエネルギー問題を提起しました。そのような中で太陽光発電、風力発電等「再生可能エネルギー」の議論がかつてなく熱くなっていますが、私は「木質バイオマスエネルギー」について考えてみたいと思います。

さて、林業関係の統計では日本国土の2/3を占める森林の材積量は約39億m³とされています。これを木質バイオマス資源利用可能量と見ますと2,450万t/年、関連産業からの発生量を入れますと



ちの暮らしを考える 題をめぐって—



2,826万t／年※¹と推計されます。日本の年間石炭使用量18,666万t(2004年度※²)の15%に過ぎませんが、カーボン・ニュートラルで、利用量をコントロールすれば、永久に使い続けることが可能です。現在、木材をチップやペレットにして燃やし、様々な熱源とする技術開発が行なわれています。しかし、今から50年位前の日本では、薪や炭という形で一般家庭の炊事・暖房・風呂用燃料等として広く使われ、そのことが今や激しい過疎化や高齢化の進む中山間地域の重要な産業として暮らしを支えていました。

木を伐ることに抵抗を感じる人がいますが、実はそうではありません。杉・桧の人工林の除間伐はもとより、天然林においても適当な伐採による更新は、森林の環境を維持する上で必要なのです。「枯れ」というカシノナガキクイムシ被害が広がっている原因の一つが老木を放置しているためと言われています。私は、将来にわたって、建築用材、燃料等として適切に伐採

し、自然・水源としての森林を守り、中山間地域を支える経済基盤としていくことも合わせて、必要だと考えています。

一方、忘れてはいけない大事なことがもう一つあります。それは、この40数年に3.6倍以上に膨れ上がった日本のエネルギー消費量※³の問題です。24時間営業のスーパーやコンビニ、テレビ放送、無数に並ぶ自販機、渋滞を繰り返す自動車などに代表される「エネルギーの垂れ流し」の見直しであり、「エネルギー消費拡大による豊かな生活」から「エネルギーの賢い節減による豊かな生活」へのパラダイム転換です。

【注】

※1:「熊本県内における木質バイオマス利活用調査 報告書」(平成23年3月 熊本県)所収データをもとに推計。

※2:「(財)石炭エネルギーセンター」資料より。

※3:「エネルギー白書 2010」による。



具体的な省エネルギー研究について

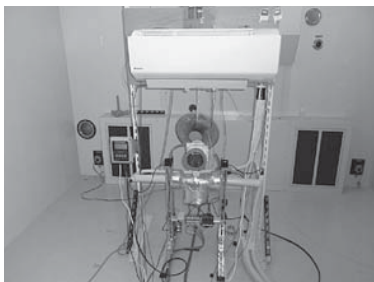
環境共生学部 居住環境学科 准教授 細井 昭憲

本研究室で取り組んでいる建築の「環境設備」分野は、主に音、光、熱環境の快適性を向上し、かつ、省エネルギーと環境負荷削減を両立するための方法を研究対象としています。日本のCO₂排出量のうち、建築関連の比率は約40%を占め、建物のライフサイクルで排出されるCO₂の約6割が空調や照明などの設備の運用によって排出されるため、日本全体の省エネルギーと環境負荷削減を考えるうえで、この分野は重い責任を負っていると言えるでしょう。以下では、本研究室でこれまで取り組んだテーマの中から、3つの研究事例を紹介したいと思います。

1) ヒートポンプの運用エネルギー評価

近年の冷暖房と給湯設備における重要な省エネルギー技術の一つとして、「ヒートポンプ」があります。身近な機器では、ルームエアコンや冷蔵庫、ヒートポンプ給湯器があり、ビル用の冷暖房にも多く使われています。ヒートポンプ機器は、コストや運用のしやすさなどに利点がある一方で、機器効率が複雑に変動するため、実使用時の省エネルギー性能の評価が極めて困難な側面を持っています。この問題を解決するために、熊本県立大学の人工気候室を用いて実験(図1)を繰り返し、その成果を現在の住宅の省エネルギー基準(住宅事業建築主の判断基準)に反映しています。

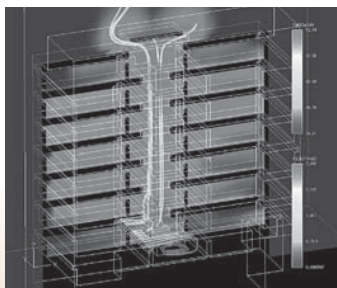
図1



2) 自然通風の有効利用

通風を上手に利用することにより、冷房エネルギーの約20%を削減することができます。しかし、機械空調設備と併用することを考えると、単に窓を開けるだけでは様々な不具合が生じます。また、自然の風の「心地よさ」についても十分解明さ

図2



れていません。気流解析(図2)や被験者実験(図3)を実施し、通風の有効利用技術の開発に取り組んでいます。



図3

3) 伝統木造建築の環境・省エネルギー性能

伝統木造建築を環境工学の視点から見た場合、多くの優れた点があるのと同時に欠点もあります。古の知恵を生かしつつ、現代の技術を活用して改良するための研究を行っています。図4は、夏と冬の2週間、ある伝統木造住宅で実際に生活し、室内環境とエネルギー消費量を計測した時の一幕です。

図4



最後に、震災後の電力供給の不足を受け、節電や省エネ意識が高まっていますが、これらが一過性の社会現象に過ぎないのか気になります。私の授業で、電力不足の問題が解決した後にも、現在の省エネ行動が継続されると思うかを学生にアンケートで問うたところ、9割の学生は「継続したほうが良いが、無理」という意見でした。この意見の背景には、現在の省エネ行動が「我慢」と捉えられていることがあると思います。今日の設備技術が居住者の環境調整に関する工夫を排除する(工夫しなくても良い)ことを目標にしてきた皮肉な結果とも言えるでしょう。省エネルギーに対しては、技術の進展と同等に、我々の快適性の考え方やライフスタイルに関する十分な議論が必要だと思っています。

3・11以降の消費生活

総合管理学部 教授 棟方 信彦

消費生活の原動力“パーセプション”

遠藤周作がかつて「事実」と「真実」の区別について述べていたことがある。世界を動かす力について考えさせる視点である。経済の大きな基盤を構成する消費生活における原動力も往々にして事実以上に真実が影響力を持つことがある。情報が制約された環境下で消費生活が続けられること一つを考えてみても、消費者のパーセプションが有する真実性に注目する必要があるように思われる。

パーセプションとは消費者のそれまでの体験が一つのモノの見方となって、消費行動に影響を及ぼすもので、あくまでも消費者の主観である。そこでは事実より消費者がどう見るかが決定力を持つのである。このパーセプションの形成に大きく働きかけるものが、忘れがたい映像である。3・11の際に日本の消費者が記憶に焼き付けた一連の映像こそが今後の消費生活の方向性を示す真実の重要な要素と考えられるのである。

学生たちはどう捉えたか

私のゼミでは毎年夏に講師を招いて「発想力」研修を行っている。今年のテーマは「3・11以降の消費価値」。3チームによるブレイン・ストーミングで取組んだ。狙いは学生の目を通して消費者のパーセプション変化を読み取ろうとすること。共通して挙がってきたのが、「地域・生活の基盤」「絆などの関係性」「情報コミュニケーション」「資源・環境」などに関わる「意識の見直し」と、そのことによってもたらされる行動変化の見通しであった。意識の見直しの方向性は、本来的なあり方かつ実現可能な姿を模索するもの、危機への備えに関連する仕組みなどのメンテ



ナンス、コミュニティの持続と支援のあり方などに代表される。注目したいのは、自然への脅威に対して多くの者が、目に見える実体と同時に目に見えない結びつきやそれを呼び覚ます自立できる精神の力の発揮を重視していることである。精神の力は悲しい記憶の転換と孤立化する心情に寄り添うことの必要を踏まえたものと言えよう。

自らの生活基盤を見つめる

意識の見直しに発する変化は「生活リデザイン」とも表現することができるだろう。生活の基盤である地域の自然と社会環境がいかにあるべきか、資源不足と危機にどのように備えるべきか、それらは自ずと地域ごとに異なり、多様な歴史的伝統を踏まえたものとなるであろう。個々の生活デザイン力が問われているのだ。自然との共生に基礎を置く歴史とその所産という資源の見直しがこれからの方向性を指し示すのではないだろうか。



<3.11の震災で亡くなられた方々の冥福を祈り、被災された皆様にお見舞いを申しあげたい>



大学全体で節電に取り組んでいます

事務局総務課

本学では、平成20年度に策定した「公立大学法人熊本県立大学環境配慮方針」に沿って、毎年「エコ・アクションプラン」を定め、環境への負荷を低減するため、学生・教職員が協働して取り組んでいます。これまで継続して取り組んでいる本学の節電への取組と平成23年度の「エコ・アクションプラン」をご紹介します。

1) 節電対策

- ①LED街路灯・照明の設置
- ②太陽光発電施設(パネル)の設置
- ③緑のカーテンの設置(真夏の太陽光遮断と断熱)
- ④「サマー・ECO・デー」の実施(真夏の1日に学内冷房設備を全面停止、大学を休業)
- ⑤未使用教室の消灯の徹底
- ⑥未使用OA機器の電源OFFの徹底、PCの輝度を下げる
- ⑦クールビズ・ウォームビズの徹底
- ⑧ノーエレベーターの実施(上下3階の昇降は階段を使用)
- ⑨エコタップの導入
- ⑩照明(電灯)の間引き、ジェットタオルの電源OFF

<電気使用量等>

(単位:kWh、千円)

項目	19年度	20年度	21年度	22年度
電力使用量	5,217,132	5,112,288	4,901,910	4,905,048
料金	76,599	78,248	70,994	68,996

(電力使用量:対前年増減比) ▲2% ▲4.1% 0.06%

2) 平成23年度エコ・アクションプラン

<重点実施項目>

- ①未使用教室等の消灯の徹底、休憩時間の部屋の消灯の徹底
- ②未使用OA機器の電源OFFの徹底
- ③冷暖房時の出入口の開閉(あとげき)の徹底
- ④用紙の両面使用等の徹底

<その他の実施項目>

- ・「サマー・ECO・デー」の実施
- ・クールビズ・ウォームビズの実施
- ・ノーエレベーターの実施
- ・緑のカーテンの設置
- ・ペットボトル・キャップの分別回収



緑のカーテンの設置



太陽光発電施設(パネル)の設置



エコタップの導入

おすすめの1冊

「日本人のためのアフリカ入門」

白戸圭一

ちくま新書 2011年 価格760円+税



「アフリカ」(サハラ砂漠以南のアフリカ)と聞いて、何を連想するでしょうか。「貧困」「部族対立」「発展が遅れている」「かわいそう」……。多くの日本人の中では、負のイメージが強いのではないのでしょうか。

本書は、アフリカ報道の最前線にいた記者が、日本人のアフリカ観を歪めてきたメディアの在り方を問い直しながら「新しいアフリカ」の姿を紹介する異色の入門書です。アフリカの問題に限らず、「現実を先入観に押し込む」メディアの報道の傾向は確かに強く感じられますし、イメージや先入観に基づく誤解や偏見、イメージや先入観に基づく事態や問題の単純化といったことは、残念ながら世の中には多くみられます。

「先入観を捨てて、自分の目で現実や真実をみなさい」。これは、研究の世界に入るときに恩師に言われたことです。当たり前のことなのですが、固定観念を抱いては、そこに進歩はないでしょう。そんなことを考えさせられる一冊でした。



総管理学部 准教授
上 拂 耕 生

活躍する卒業生

さまざまな分野で活躍する熊本県立大学の卒業生を訪ね、現在のお仕事や、ご自身の学生時代について、語っていただきます。

照明設備は、私たちが生活する“住まい”をより豊かな居住空間へと変えてくれる大切な要素です。環境共生学部居住環境学科で人間の居住空間について学び、現在「照明のプロ」として活躍される濱口沙織さんにお話を伺いました。

コイズミ照明(株)
濱口 沙織 さん



Profile

2009年3月 熊本県立大学 環境共生学部 居住環境学科卒業。2009年4月 コイズミ照明(株)ショールーム名古屋に配属。

色んなことに挑戦することで、 将来の方向性が見えてきます

現在の仕事内容

私は、コイズミ照明(株)のショールームで働いています。ショールームには、たくさんの照明器具が展示しており、また、シミュレーションルームで光の体感をして頂けるようになっています。主に、新築されるお施主様がいらっしゃって、どんな照明が適しているのかなどのアドバイスをし、それぞれのお施主様によって好みや、明るさの感覚も違うので、コミュニケーションを取りながら、ご要望を入れつつその方に合った提案をしています。

照明はインテリアの一部ですが、照明によって部屋の雰囲気も大きく変わりますし、家を建てることは一生で一度の大きな買い物なので、責任感や緊張感を持って、きちんと対応するように心掛けています。一人前の照明のプロになるべく、勉強の毎日ですが、やりがいを感じて仕事をさせて頂いています。

学生時代・大学で得たこと

私は在学時、バレーボール部の主将をしていました。チーム力が必要な競技で、チームをまとめることがとにかく大変でした。チームがバラバラになりかけたことも

ありましたが、話し合いを通して、がむしゃらにあきらめずにやって来たことを思い出します。色んなことを一緒に乗り越えて来たからこそ、今でも大切な仲間です。部活を通して、大切な仲間が出来たこと、また、忍耐力や協調性などを学んだと思います。

また、学科の方でもさまざまなことに取り組んで来ました。他大学とワークショップを行ったり、他大学と共同で建築設計展を開催しました。他大学の人のコミュニケーションを通じて、自分の視野が広がり、「もっとこんなことにも挑戦したい」「こんな考え方もあるのではないかなどといった積極性が芽生えたことは、今の仕事にも生かされていると思います。

学生時代にたくさんの人に関わって、色んな人の意見を聞いて、積極的に物事に取り組んでみて下さい。それが、部活や勉強だけではなく、旅行に行っても色んな所を見てみたり、自分の趣味を見つけてみるのも良いと思います。まだ、将来やりたいことが決まってない人でも、とりあえず少しでも興味があることに触れてみて下さい。何がきっかけになるか分かりませんし、まだまだ大きな可能性が誰にでもあると思うので、色んなことに挑戦して、大学時代の4年間を有意義に過ごして頂きたいです。

国際交流

～世界を学ぶ、海外と交流する～

International Exchange

祥明大學校短期研修団との交流

文学部 日本語日本文学科4年 村田 優里奈(日本語教育研究室所属)

6月27日(月)～7月4日(月)までの8日間、姉妹校である韓国の祥明(さんみょん)大學校の短期研修団の皆さんが来日され、今年は研修団として10名の学生が参加しました。午前中に行われた日本語の授業は、私が所属している研究室の院生3名と4年生7名が担当しました。今年は、「日本の文化を知ろう」をテーマに、日本昔ばなしのアフレコを行いました。題材に「花咲じいさん」と「さるかに合戦」を選び、大学の授業ではなかなか学ぶことができない若者言葉と熊本弁にアレンジしました。聞き慣れない言葉や、独特のイントネーションに学生達はとても苦戦していましたが、みんなとても真面目で、授業時間外でも熱心に練習をしていたようで、どんどん流暢に読むことが出来るようになりました。集大成として7月1日(金)に発表会を行いました。僅か400分という短い練習時間だったとは思えない程の立派な発表でした。

私はこの短期研修団との交流に伴い、人生で初めて、ホームステイの受け入れを行いました。受け入れをしようと思ったのは、2年前に私のホストファミリーをしてくれた子から、今回研修に参加するという

メールが来たからです。私の家では、その子を含めた2名を受け入れました。2人共、熊本に来たのは初めてでした。そのため、週末には熊本城や阿蘇山等の観光地を回ったり、2人が好きだと言っていた蕎麦を打ちにそば道場に行ったりしました。熊本が好きになったと言ってくれた時は本当に嬉しかったです。

今回、2人と同じ時間を過ごしたことで、日韓の文化の違いを新たに発見することが出来ました。また、他の国の言語を学ぶことで自分の世界や自分の可能性をどこまででも広げることが出来るのだということに改めて感じました。

私の両親は、日頃、外国の方と接する機会がないため、私は勿論、私の両親にとっても今回のことはとてもいい経験になりました。一緒に通学したこと、大学帰りに遊びに行ったこと、夜遅くまで話したこと等、本当に素敵な思い出がたくさん出来ました。至らないところは多々あったと思いますが、2人のおかげで本当に楽しく、またとても刺激になった1週間でした。2人には本当に感謝しています。



世界に伸びる大学を標榜する本学では、「国際性の推進」を三大理念のひとつに掲げています。その理念をより具現化するため「国際交流ビジョン」を策定し、「学生」、「学術研究」、「地域」、それぞれの視点から全学的に国際交流活動を推進しています。

韓国文化探訪に行って

総合管理学部 総合管理学科2年 松下 亜美

9月15日から1週間、韓国文化探訪団として姉妹校である祥明大學校を訪れました。私自身、韓国に行くことも、ホームステイを受け入れてもらうことも初めてだったので、とても心配しながら迎えた15日でした。空港に着き、私たちを迎えてくれた祥明大學校のみんなは、日本語が上手な人がほとんどでした。私は、韓国語の授業を1年生の時から受けているので、わかる単語で話してみたり、わからない単語は、私をホームステイで受け入れてくれたジナに聞くなどして、私自身も韓国語で話す努力をしました。初日でたくさんの友達ができ、行く前の不安などいつの間になくなっていました。私たちを喜ばせてくれるプログラムを組んでくれていて、また、韓国料理を食べに連れて行ってくれたりしました。みんながとても親切なので、嬉しかったです。

ジナや祥明大學校の人とたくさん話す中で、文化の違いを多く感じました。一番印象に残ったことは祥明大學校の講義を受けた時の教授の話でした。その日の講義内容は、日本の教育勅語についてで、日本人である私たちすら知らない内容を習っていたことにも驚きましたが、それ以上に驚いたのは、教授が

探訪団の一人に「サークル(部活)に入っていますか」と質問され、それに対し「入っています」と答えると、「いいですね、うらやましい」とおっしゃったことです。私はその一言に疑問を感じ、ジナに尋ねたところ、日本は部活をする人が多いが、韓国では以前、朴正熙大統領時代の影響で勉強ばかりが強調されたため、部活をする人が少ないということでした。これは教授の考えだとジナは言っていましたが驚きました。今、韓国の教育が世界から注目されており、確かに見習うべき点はいくつもあります。勉強では学べない何か部活にはあると私は思うので、部活ができずに過ごしてきたことを少し残念に感じるとともに、考えさせられる話でした。

この1週間でたくさんの友達と思い出ができ、いろいろな文化や考え方の違いも感じました。韓国についても、日本についてもさらに興味を持ち、学ぶ意欲が湧きました。

このような機会を設けてくださった、県立大学と祥明大學校に感謝の気持ちでいっぱい、とても充実した1週間でした。



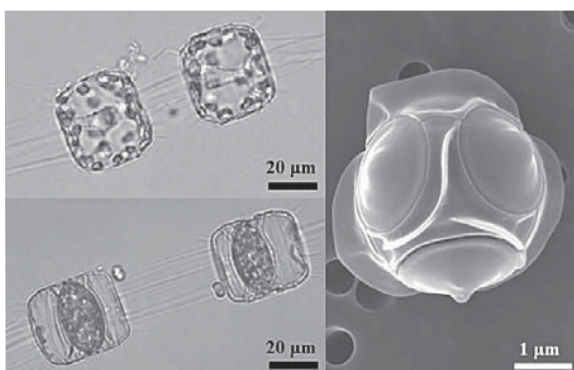
プランクトンの「生き様」を観察する



環境共生学部 環境資源学科 講師
一宮 睦雄

Profile

東北大学大学院農学研究科(博士後期)修了。
東北区水産研究所研究支援職員などを経て、
2011年4月より現職。



珪藻: *Thalassiosira australis* の栄養細胞(左上)と休眠細胞(左下)、
バルマ藻: *Triparma laevis* (右)

海の生態系を理解する

プランクトンを中心として、海の生態系に関する研究を行っています。

海の生態系は、植物プランクトンを出発点として動物プランクトンから魚類へと食物連鎖が繋がっていきます。光合成によって作られる一次生産物が、高次の捕食者へと移行していく構造は陸上の生態系と同じです。最も大きな違いは、一次生産者である植物プランクトンが肉眼では見るできないくらい小さいことです。原生生物である植物プランクトンは1日数倍に及ぶ速度で分裂し、動物プランクトンに捕食される、もしくは海底へ沈降していきます。海の生態系は小さなプランクトン同士の食物連鎖を経て、膨大な量の海洋生物を支えています。

海は二酸化炭素の吸収源として重要な役割を果たしています。陸上の森林が樹木として大量の炭素を貯蔵している一方、植物プランクトンは固定した炭素を次々と捕食者や深海へ運んでいます。結果として、植物プランクトンによって固定される炭素量は陸上植物のそれに匹敵すると言われています。

プランクトンの多様な「生き様」

海水を顕微鏡でのぞくと、様々なプランクトンを観察することができます。私は主に珪藻類と呼ばれる細胞壁がガラス質でできた植物プランクトンの研究を行っています。珪藻類は海洋一次生産の約4割を占めており、10万種を超える高い多様性を持った生物群です。



八代海での水産環境アセスメント実習
(鹿児島大学海洋資源環境教育研究センターにて)

研究スタイルとしては、プランクトンを顕微鏡で観察するオーソドックスなものです。個体数や形態の変化から、どのような生活史を送っているのか？どれだけ食べられているのか？などを調べていきます。植物プランクトンは多様な生活史を送っており、例えば厚い殻で覆われた休眠細胞を形成して越冬する種がいます。増殖不適な時期になると海底に自ら沈んでいき、泥の中で発芽する好機を窺っています。休眠細胞の厚い殻は動物プランクトンによる捕食から身を守る役割もしています。一方的に食べられるのではなく、捕食に対する対抗手段を獲得してきたと考えられています。近年では、珪藻類と同様にガラス質の殻を持つパルマ藻の単種培養に世界で初めて成功しました。パルマ藻類は珪藻類と近縁関係であることが判明し、珪藻類の起源に迫る重要な生物群であることがわかってきました。

近年の観測技術の進歩によって、植物プランクトンの量や一次生産速度が光学機器や人工衛星によって比較的容易に測定できるようになり、全球的な物質循環過程が明らかになりつつあります。しかし、このような機器による観測では個々のプランクトンの「生き様」が見えてきません。プランクトンは生き残るために、様々な工夫を凝らしています。プランクトンを一個体ずつ観察するのは手間のかかる作業を伴いますが、色々な海域に見事に適応した生態を明らかにすることができます。さらには、上述したようなプランクトンによる「積極的に海底へ沈む」、「食べられないように身を守る」といった行動が、海の世界食物連鎖や物質循環に与える影響を明らかにしたいと考えています。

海洋資源学研究室

海洋資源学研究室では前任の大和田紘一先生が熊本県の八代海でプランクトンの研究をされてきました。八代海ではここ十年くらいの間に植物プランクトンの異常増殖である赤潮が頻繁しています。濃密な赤潮が発生すると、プランクトンが魚の鰓に詰まり、魚が死んでしまいます。熊本県ではブリやマダイの養殖が盛んに行われていますが、赤潮によって多くの養殖魚が死亡する大変な漁業被害が起こっています。

実験室内で様々な植物プランクトンを単種で培養していると、培養液が数日で着色してきます。これは、多くのプランクトンが潜在的に赤潮を起こす能力を持っていることを意味します。しかし多くの場合、現場では適度な密度に保たれています。赤潮とは捕食 - 被捕食などの生物間相互作用のバランスが崩れた時に生じる現象なのだと理解できます。赤潮発生のメカニズムを解明するためには、赤潮生物だけでなく関係の深い他の生物群も同時に調べていく必要があります。

熊本県には八代海だけでなく日本で最も干満の差が大きい有明海、外海に面した天草の海など研究フィールドとして興味深い海域があります。熊本の海でプランクトンがどのような「生き様」をしているのかを明らかにしていきたいと考えています。

山都町と包括協定を締結

平成23年度5月17日に熊本県立大学と山都町は、包括協定を締結しました。この協定は、本学と山都町が、包括的な連携のもとに、地域資源を活用した地域活性化のための連携など様々な分野において、相互に協力することを目的とするものです。今後、本学と山都町は、相互に連携し、地域活性化、地域産業振興、教育・文化発展、人材育成やまちづくりなどに取り組んでいく

こととしています。

山都町との包括協定締結は、16例目(自治体としては14例目)となります。



熊本県立大学と山都町との包括協定調印式
(H23.5.17)

県内4市町で「くまもと緑のリレーフォーラム」を開催

熊本県立大学は、くまもと緑・景観協働機構(事務局:熊本県都市計画課景観公園室)と協働し、良好な景観づくりを目指した取組を進めています。昨年、自治体の首長や職員・関係団体を対象とする「くまもと景観トップセミナー」を開催しましたが、今年は花や緑によるまちづくりに関係する団体や市民の皆様を対象に「くまもと緑のリレーフォーラム」を県内4箇所(天草市、玉名市、菊陽町、人吉市)で開催し、それぞれの地域

の特色を活かしたテーマのもと、講演、事例報告、パネルディスカッション、ガーデニングセミナーなどを行いました。



「くまもと緑のリレーフォーラム in きくよう」
(H23.5.28):ガーデニングセミナー

食育推進ボランティア内閣府表彰と熊本県立大学食育レシピの発行

熊本県立大学食育プロジェクトの活動が、内閣府が実施する平成23年度食育推進ボランティア表彰において高い評価を得、表彰を受けました。この表彰は、若い世代を対象とした望ましい食習慣の普及啓発等の食育活動の推進を奨励するため、平成21年度から実施されていますが、本学については、毎月食育の日を定め、包括協定連携先等の地域の食材を使用したオリジナルメニューを学生食堂で提供するとともに、リレートークなどにより食意識に関する情報を発信したこと、また、他大学・地域住民への食育活動の展開等も行ったこと、などが高く評価されました。

また、こうした活動の成果を、「熊本県立大学食育レシピ」と「熊本県立大学食育メニュー集」の2冊の本にまとめました。熊本県立大学食育レシピは、平成22年度に学生が包括協定自治体に現地視察し、考案・提供し

たオリジナルメニューのレシピを中心に、関連する食材等に関する情報も掲載したもので、全国主要書店

で販売しています(A5判:税込615円)。熊本県立大学食育メニュー集は、平成18～21年度までに実施した「食育の日」のオリジナルメニューに関する情報をまとめたものです(B5判)。食育の拠点にふさわしい食生活の推進のため、いずれも本学学生に配布しました。



海外の3大学と学術交流に関する覚書を締結

本学の理念の一つである「国際性の推進」に基づき、さらなる国際交流をはかり、教育及び学術研究上の交流を一層推進するため、今年度新たに以下の3大学と「学術交流に関する覚書」を締結しました。

大 学 名	開 南 大 学	ソウル市立大学	ラトガース大学
覚書締結日	2011年6月1日	2011年6月17日	2011年9月12日
所 在 地	台湾・桃園県	大韓民国・ソウル特別市東大門区	アメリカ合衆国ニュージャージー州
学 生 数	9,000人	12,450人	56,800人

※既に覚書を締結している大学は以下のとおりです。

祥明大(大韓民国)、モンタナ州立大学ボーズマン校(アメリカ合衆国)、モンタナ州立大学ビリングス校(アメリカ合衆国)、ワイルラック大学(タイ)、韓国海洋大(大韓民国)、広西大学(中華人民共和国)、台北科技大学(台北市)

「2011 熊本県立大学シンポジウム『地域に生き、世界に伸びる』」を開催!

公立大学法人熊本県立大学では、「地域に生き、世界に伸びる」というスローガンのもと、大学の価値向上に努めています。今年度が第1期中期計画の最終年度にあたることから、このスローガンを切り口とした4つのシンポジウムで構成する「2011 熊本県立大学シンポジウム『地域に生き、世界に伸びる』」を開催しています。

9月27日(火)の「地域連携センター開設5周年記念 ー熊本県立大学と地域との連携を点検するー」を皮切りに、10月22日(土)には「L.L. ジェーンズ来熊140年記念シンポジウム ージェーンズが遺したものー」を開催しました。今後、以下の2つのシンポジウムを開催しますので、ぜひお越しください。

■「熊本県立大学・祥明大(韓国)第4回学術フォーラム」

ー東アジアの大交流時代を迎えてー

平成23年11月20日(日) 11:00~17:00 於:熊本県立大学

■「地域連携シンポジウム Part2」

ー地域連携を超え次なる展開ー

平成23年11月22日(火) 9:30~16:30 於:熊本県立大学

熊本県立大学おおいた講演会を開催します!

公立大学法人熊本県立大学では、九州圏域における存在の見える大学を目指して、本学教員による講演会を平成20年度の鹿児島県を皮切りに九州各県で開催していますが、今年度は下記のとおり大分県で開催します。

本講演会では、本学教員が自身の研究活動に関連したテーマで、大分県に關係する話題などに触れながら講演を行います。また、本学に興味のある高校生の方々に本学の概要についてご説明します。入場は無料ですので、奮ってご参加ください。

■日時 平成23年12月11日(日) 13時30分~15時40分 ※13時開場

■会場 コンパルホール 4階「視聴覚室」(大分市府内町1丁目5番38号)

■対象 高校生、高校教員、本学在学生の保護者、同窓生、本学に関心をお持ちの方

熊本県立大学文学部特別講演会

「ジェンダー・文化・身体ー現代女性小説における〈食〉」を開催!

現代小説には食べ物が多く描かれている作品が多くあります。トニ・モリソン(アメリカ)、マーガレット・アトウッド(カナダ)、ヒロミ・ゴトー(カナダ)、アンジェラ・カーター(イギリス)、ミッシェル・ロバーツ(イギリス)等の小説を取り上げ、これらの作品に描かれている〈食〉が、栄養摂取という本来の目的を超えて、作品の登場人物を取り巻く文化・社会・歴史)とどのように関わっているのかを考察します。参加無料ですので奮ってご参加ください。

■日時 平成23年12月17日(土) 13時~16時15分 ■会場 熊本県立大学中ホール

■講師 エマ・パーカー氏(英国レスター大学上級講師)

後援会便り

後援会とは

- 本学学生の保護者またはこれに準ずる方を会員として組織されています。
- 大学の教育事業を後援し、大学と家庭及び社会との協力によって、大学教育の成果をあげることを目的としています。

【後援会の事業】

次の4つの事業を中心に学生の活動全般を支援しています。

《就職対策事業》

- 就職対策講座を開催
- 適職診断プログラムの実施、各学部による就職支援事業への助成、OB・OGと連携した就職支援事業の展開

《学生活動支援事業》

- 各サークルの活動費の一部、全国大会出場経費等の一部を助成
- 学生のリクエストに応じ図書を購入し、図書館へ配置

《国際化推進事業》

- 海外留学・研修期間に応じて渡航経費の一部を助成
- 留学対策講座の開催

《教育研究助成事業》

- 学生共同自主研究助成(学生グループが自主的に行う研究経費の一部を助成)
- 国内学生大会等出場助成(インターゼミナール等への出場経費の一部を助成)

※途中年次であっても随時入会を受け付けています。
後援会事業をご理解いただき、ぜひご加入ください。



公務員試験対策講座の様子

最近の厳しい就職状況を乗り切るために、後援会では様々な就職対策講座に助成しています。就職対策講座には公務員試験対策講座、就職試験対策作文講座、ITパスポート試験対策講座、二級建築士講座、簿記講座等があり、学生がそれぞれの将来に向けて進路を考え、またキャリアアップ対策として自分にあった講座を選び、毎年約400名の学生が受講しています。

このコーナーでは、サークル活動をはじめ、地域で活躍する熊本県立大生の声をお届けします。

中国語講座を行っている留学生

本学では、学生の国際交流への関心を高め、留学生との交流の推進や地域の方々との国際交流を目的として、後援会による支援のもと、留学生による語学講座を例年実施しています。本年度中国語講座(中級)を担当している、大学院環境共生学研究科・博士前期課程1年 王穎(オウ エイ)さんと総合管理学部2年 李莉(リ リ)さんをご紹介します。

外国語を学ぶこと、教えることはありますが、自分の母国語を教えることは初めてです。「中国語は難しい」と言われますが、実際には楽しみながら勉強している姿が見られました。中国語が難しいという一つには発音の問題があるでしょう。一つの漢字にあたり4つの声調があるので、外国人にとっては迷うことが多いのだと思います。しかし、講座をやっている時に、難しい発音があれば、皆口真似をして、ディスカッションをして、繰り返し練習することで、話せるようになりました。



王穎さん

受講生の中で、4人の一般の方は最初から、ずっと来て下さり、真面目で勉強熱心で本当に尊敬します。また、2人の学部の学生さんは一、二年程度勉強して上手に中国語で話せるようになったことに驚きました。彼らの中国語を学ぶスピードは私が日本語を学んだスピードより速いということです。

「教えることは学ぶこと」。週一回の講座ですが、私にとって、たくさんの収穫がありました。後期の講座も担当しますので、皆さん中国語に興味があったら、ぜひご参加ください。

今回中国語講座を担当してきて、中国語を教えながら、自分の日本語の勉強にもなりました。どうやって解釈をして説明をすれば、簡単に面白く中国語を教えていけるのか、学べるか考えました。

最初、受講生は私と同年齢の人が多くは思っていたのですが、実際は社会人の方が多くおられました。その中には中国に4年間も住まっていた人もおり、中国へ旅行に行ったことのある人、それに私と同じ留学生として中国で半年住まっていた方もいました。

私は講座を担当するのが楽しかったです。同年齢や先輩の学生さん、そして一般の受講生の方たちも優しく、国籍関係なく良いコミュニケーションが取れました。

私の弱点は、大勢の前で話をする、とすごく緊張してしまうところで、頭が真っ白になってしまうこともよくあるのですが、この講座を担当し、この点を克服することができ、多くの人の前で話をスムーズにできるようになりました。そして、この講座を通じて、日本人とのコミュニケーションの機会も多くなり、お互いの文化の理解も深めることができたと思います。

自分にとって、この講座を担当して良いことが沢山ありました。私もそのなかで少し成長できたと思っています。



李莉さん

<講座の概要>

中国語講座とは本学に在籍している中国人留学生が、受講を希望する在学生および地域住民の方を対象に、週1回授業を行うもので、受講料は無料です。クラスは初級と中級があり、1クラス10名程度、今年度は前期・後期合わせて15回の授業を予定しています。

熊本県立大学未来基金へのご協力に、心よりお礼申し上げます。

熊本県立大学未来基金につきましては、平成23年3月1日から9月30日までの間に、下記のとおり個人10名の方から総額835,000円のご寄附をいただき、これにより平成21年9月8日設立以来の基金総額は、88,792,255円(申し出分を含む)となりました。皆様のご協力に厚くお礼申し上げます。ご寄附をいただきました皆様に感謝し、ここにご芳名を記載させていただきます。

1. お名前・寄附金額の掲載を希望されたご寄附者

(寄附金額別、五十音順、敬称略にて掲載させていただきます。)

1万円…………… 蓮田 禮子

5千円…………… 本馬利枝子

3. お名前・寄附金額の掲載を希望されないご寄附者

4名

2. お名前のみ掲載を希望されたご寄附者

(五十音順、敬称略にて掲載させていただきます。)

※○内の数字は、累積寄付回数です。

飯尾 雅嘉 磯辺 節子 梅田 晴子② 土屋 睦子

熊本県立大学CPD(継続的専門職務能力開発)センターが完成しました!

熊本県立大学の卒業生はもとより、広く県内の企業、団体等で働く社会人を対象に、学び直し、学び直しなど専門職業人としての資質能力開発の機会を提供し、県民や社会に開かれた施設として熊本県立大学CPD(継続的専門職務能力開発)センターが完成し、10月26日(水)に開所式が行われました。

センターの新設にあたっては、地域社会が必要とする大学づくり、知識基盤型社会に対応できる大学づくりを先行的に進めるために造成した「熊本県立大学未来基金」の一部を活用しています。

【施設の概要】

(1)室 面 積／185㎡

(2)収 容 人 員／105席 (内訳)固定席 60席

可動席 40席(講義形式)

※円卓による会議も可能(最大28席)

(3)設 備／・視聴覚システム(150インチスクリーン)

・個別空調システム

(4)使用時間等／午前8時から午後10時まで(1,500円/時間)

(5)場 所／前サブアリーナ小体育館



左から古賀学長、荒井理事長、池田さん、本田紫苑会会長



また、開設にあたり、本学の卒業生である日本画家 池田 啓子さん(京都日本画家協会会員)から、日本画「秋の蝶」が寄贈されました(作品は裏面をご覧ください)。

熊	本	県	立	大	学
ギ	ャ	ラ	リ	ー	



秋の蝶 作／池田啓子

130.3cm×162.1cm

熊本県立大学CPD(継続的専門職務能力開発)センターの開設にあたり、本学の卒業生である日本画家 池田 啓子さん(京都日本画家協会会員)から寄贈されました。

<池田 啓子氏 略歴>

上村 淳之氏に師事

1971年 熊本女子大学(現熊本県立大学)国文学科卒業

1981年 京展入選(85回)

1982年 春季創画展入選(以後出展)

1984年 京都美術展入選(85回)

1992年 十美展入選

1994年 東京新宿京王デパートで個展

1999年 熊本鶴屋百貨店で個展

2011年 熊本県立美術館分館で「池田啓子日本画展」を開催

「春秋彩」へのご意見・ご感想お待ちしております。

本誌についてのご意見・ご感想を下記までお寄せください。
 いただいたご意見は、今後の広報誌編集の参考にさせていただきます。
 〒862-8502 (住所記載不要)
 熊本県立大学企画調整室「春秋彩」担当行
 FAX 096-384-6765 E-mail kikaku@pu-kumamoto.ac.jp

発行：熊本県立大学

〒862-8502 熊本市月出3丁目1番100号
 TEL 096(383)2929(代)
<http://www.pu-kumamoto.ac.jp/>

再生紙を使用しています



この印刷物は大豆インキを使用しています